

認定こども園

令和2年1月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 1月号

新年おめでとうございます。平成から令和に元号が変わって初めてのお正月です。そしてオリンピック・パラリンピック開催&うるう年。この変化の時期にこれまでの取り組みを改めて考えてみました。

-これから必要となるキーワードは“生み出す力”-

20年後の未来に活躍する子どもたちを待っている社会は今とはかなり異なる世界になっていると感じます。無くなる職業と新しく誕生する職業の中で、人が介在する役割が簡素化されていくものが増えてきます。こうした社会の傾向は避けられず、その世界では生き残るための資質として「生み出す力」を備えた人が活躍します。

従来の働き方は大きく変化し、「使う」から「生み出す」に求められるものが移行します。学習が「教えてもらう」から「学ぶ」に変わってきたように、受動の姿勢から能動の姿勢へと変化しながら、人の資質として、先ほど述べた「生み出す」能力が求められるようになります。

また、生み出すと共に消去することも同時に必要となります。それは、私たちはPCのメモリーと異なり、無限に保持する中身を蓄積することが出来ないからです。そして、私たち保育者の未来も同様です。決まったことや、これまで身につけてきたことだけでは未来に活躍する子どもたちを育てられなくなっていきます。保育者自身が「生み出す」能力を持っていないとまったく対応できなくなるということです。

当面は、均質な部分は機械とAIが担当し、機械とAIでは処理しきれない部分を人が担当するというSFの世界と思われていたことが現実化してくるのです。教育の世界は無理だと思われていたことが既に現実化しています。今後、AIはその能力を益々高度化していきます。

では、どのようにしたら「生み出す力」が身につくようになるかという点、「好奇心」と「探究心」が自分の中に育つことです。そして、その心を育てる原動力となるものが、幼児期の多様な経験や体験です。また、子どもの能力を大人の考えで狭めないように、むしろ最大限に伸ばせるようにあらゆる環境を整えることです。

保育に携わる者としては、先を見て、今の自分を変えて行く必要があります。増やすものの反対側には必ず減らすものが存在しますが、減らすことを恐れ、変えられないのはよいことではないので、よく見極める目とチャレンジする気持ちが大切になります。それらのことを踏まえ、同じを求めるのではなく、違いを大切にすることが未来に生きる子どもたちへの大きなプレゼントになることを期待して新しい年の保育者としての実践をしていきたいと考えます。

昨年11月末に4年間かけて研究してきた本園の取り組み（みつける・みつけるための援助・つながる・かんがえる）について先生方で検証をしました。結果からお話ししますと、やってきたことは大変だったが、子どもたちと自分たちが、研究を始める前と後で、これまでとは大きく変化してきたことが実感できたということでした。このことから分かるように、新しい取り組みを計画的に続けてきたことがその“実感”につながってきたといえます。始める前はそれぞれの前に大きな壁が存在していたことですが、今はその壁を乗り越えられそうだという気持ちが先生方自身の心の中に生じてきたはずですが、こうした継続した取り組みはとても大変で避けたいのが人の常ですが、不安でくじけそうになる自分との闘いをしてきた先生方には、大学の偉い先生が書いた論文よりももっと貴重な“自分”が存在するようになりました。

どこからか持ってきたものを使っての保育は自分のものではありません。もちろん先行事例を知ることは大切ですが、それに流されてしまう事の方が大きな損失です。園長として私が敬愛幼稚園の先生方のこれからの保育に求めたいのは、もっと自分流を出せるくらいに、そして、たくさん保育関係の論文や本を書いている学者に負けないくらいの自分の保育を確立してほしいという願いです。

子どもたちを目の前にした現場で日々奮闘できる強みをぜひ活かしてほしいと思っています。これまでたくさんの教育現場を見てきましたが、いずれも大変忙しい現場です。しかし、本当に忙しい先生程「忙しい」を口に出しませんでした。そして、そういう先生は間違いなく心の体力があり、教育力がありました。確かに子どもを前にして多忙であることは間違いありませんが、そうした環境の中でもきちんと自分を律する心を常に持っています。本当は、一番子どもたちに“生きる力”をつけさせてもらっているのが先生という仕事なのです。

(園長 杉山清志)